

浦井先生／機械と普遍言語

さっそくエッセイの続きをアップして頂き、ありがとうございます。いまだ全ての議論を尽くしたわけではありませんが、現時点答えられる範囲で、浦井先生のご質疑に答えようと思います。

いささか長くなり、掲示板に貼り付けるのが躊躇われたので、添付ファイルでお送りします。

*

つい昨日NHKスペシャルで、AIの黒魔術化の問題を取り上げていて、興味深く見たばかりです。

「人工知能 天使か悪魔か 2017」

<https://www.nhk.or.jp/docudocu/program/46/2586947/index.html>

将棋ソフトのポナンザが人類との最終決定戦の第1局で、初手いきなり金を飛車の横付けしたのを見て、将棋に無知な私でさえ思わずのけぞりました。対戦相手の佐藤天彦名人も、回りの関係者も呆気にとられ、頭を抱えている。何の意味もない手です。ところが、その有り得ない手が後で効いてきて、ついに機械が圧勝するのです。

その他にも、タクシー会社がコンピューターにデータ分析させ、その指示通りクルマを移動させると確かに乗客が見つかり、売上げが増える話。あるいは面談した社員の言葉をコンピューターに打ち込み分析させ、会社を辞めたがっている社員を見つける話などが紹介されていました。アメリカの刑務所の例では囚人の再犯率を予測するのにコンピューターが使われているらしい。

なぜそこに乗客が出現すると指摘できるのか？ なぜ社員が辞めたがっていると思抜くのか？ なぜ囚人が再犯すると判るのか？ どの例でも重要なのは、なぜそうコンピューターが予測し得たのか、人間には全く解らないという点です。

その意味で、現代の情報機械を「アルゴリズム的なフローチャートが書ける、その意味で設計図があるということとほぼ同義」と定義するのは無理だと思います。むしろ人間には理解できないアルゴリズムを機械が自動生成するような時代になっている。なぜ機械がそこまでの「進化」を遂げられたのかを、これ

までの機械と知性の歴史を振り返り、様々な角度から検証する必要があるかと思われま

す。人間の知性を超えた判断を示すとき、人工知能はどのように思考しているのかなるほど機械言語自体は論理に則って書かれている。原則としては二進法的な有限の代数が用いられているのでしょうか。が、そこでの言語の中身が、これまでの工学機械とは変化してきているのではないのでしょうか。飛躍が生じていると言ってもいい。

浦井先生が仰る「普遍言語」という言葉の意味が私にはよく解らないのですが具体的にはどのような記号システムを念頭に置かれているのでしょうか？もし数学、ないし代数システムだとしたら、それは十全には「普遍的」では有り得ないと思います。たぶんホワイトヘッドを使って、それは言えるのではないかと思っていて、いずれ論じる予定です。この件は恐らく『プリンキピア・マテマティカ』の挫折と関わる。

たとえばライブニッツのいう普遍言語は、たんなる代数学のシステムではありません。「位置解析について——ホイヘンスへの手紙」によれば、自分は新しい記号法の原理を発見した。これは代数学とは全く異なり、想像力に依存する万象を図形なしに表現しうるものだ。アルファベットの文字を使い、どんなに複雑な機械でも描写できる。記号を解釈すれば図形が心中に浮かぶのだと彼は言う。

「この方法によって力学をほとんど幾何学のように取り扱うことができるし、物質の性質の探索にすらすら達することができます。なぜなら、物質の性質は大抵の場合、ある種の形に、また感覚できる部分に依存しているからです」（『スピノザ／ライブニッツ』世界の名著、470頁）。

この信念をもってライブニッツは、たんに解析幾何学ばかりでなく、また数学や物理学ばかりでなく、「形而上学や道徳においても、人を誤りなく真実へと導いていく普遍言語を形成することが可能である」と主張したのだと、とりあえずは言えましょう（ジェイムズ・ノウルソン『英仏普遍言語計画——デカルト、ライブニッツにはじまる』（浜口稔訳、工作舎、1993年、160頁）。

ところが、ライブニッツの構想はもっと深遠だったように私には思われる。物質とは事象の根底にあるものですが、その性質は「形」いいかえれば私たちが

感覚できる部分に依存する。その表象ないしイメージを、目に見える形やモデルや図形としてではなく、記号により表現するのが可能だと上で彼は言っています。これはたんなる真実を語らんとする普遍言語への夢ではなく、世界の一切を表象する記号体系への夢と見なさねばなりません。

この意味での普遍言語は、ある意味で可能かもしれないとは思っています。それは「映像言語」です。もっと言えば映画です。人類の普遍言語とは映画であり、映像ではないか。なぜなら生命は映画のように動く。生命は映像だと思うからです。ライブニッツの時代には映画がなかった。だから彼は「表象」という概念を用いる他なかったのではなかろうか。この意味での普遍言語は、むろん論理や推論を遥かに超えるものです。

**

もうひとつは「哲学的議論ということの何であるか」という問いですが、この点も私にはピンと来ません。というのも、これまでの哲学史とは「『哲学的議論とは何であるか』についての議論」を数千年くり返してきたと言っても過言ではなく、論者により回答は異なるとしか言いようがない。決して一般的な合意に達することはなく、哲学の領域において一般的な理論が形成されることは有り得ないでしょう。

そのことに不満を覚える大学人は少なくなく、現代の講壇哲学においては現象学派や分析哲学派が覇を競っていると言えなくもありません。が、それは所詮コップの中の争いと言うほかになく、それにより何か確実な発見が行なわれ、人類全体の洞察が深まることは有り得ないだろうと私は見えています。

むしろ「限定がない」という点に哲学の特徴があると私は考える者です。方法の探求それ自体が方法になるような思考が哲学の本質である、と。そんな意味での方法の自由ないし多様性を確保するのが哲学の重要な仕事ではないか。

むろんのこと、なんらかの限定がなければ考えることはできない、ものを言うこともできない。最低限なんらかの対象を定立することが必要です。端的に「目的」が必要です。

目的との関係で方法は否応なく限定される。そして目的もまた多数多様です。

医者には患者を救うという目的がある。政治家には経世済民という目的がある。教師にも馬鹿を少しでも賢くするという目的があります。目的との関係で方法が定まる。

社会には一定の目的が必要です。さもないと漂流するだけになる。個人にはそれほど厳密に目的が要求されるわけではありませんが、自分なりの目的を掲げることを行なえば、多くの場合、大勢に流されるままになるでしょう。

ならば哲学者に目的は存在するだろうか。たとえば、目的が存在するか否かを問うのが目的だと言えなくもない。プラトンやアリストテレスのような偉大な哲学者は、目的それ自体を問うた。それが彼らの方法にもなっている。

とはいえ誰もがプラトンやアリストテレスになる必要はない。各人が一定の方法論的確信を持ちながらやって行くしかない。私の場合は、象徴やイメージや機械の問題をこれまで扱ってきたし、今後もそれを続けて行くでしょう。それらの解明を目的とすることで、自ずから方法論的に制約を受けることになるわけで、それは致し方ありません。

別の言い方をすれば、これまでの哲学が一般的なやり方として認めてきたような個我や、論理や現象の分析からは出発しないということです。むしろ文学や絵画や映像から出発する。別の言い方をすれば「哲学的議論とは何か、どうあるべきか」という基礎ないし方法への問いから始めて演繹的に言葉を繰り出すようなやり方はしない、ということです。今この時において語れることを語るという態度でもあります。

そもそも自分を哲学者と見なすことすら私にはありません。というのも、哲学的テキストにおいて機械はいかに表現されているかを研究する者は、決して哲学者では無い。そのことを自覚した上でやっているからです。それは批評的な取り組みだと言えるかもしれません。というか、この意味での「批評性」こそがむしろ哲学の方法たるべきだと私は考える者です。